

# <国語科>

## 指導事例一覧

番号	科目名	言語活動の特色	単元名	分類	活動
1	国語総合	1年間を通してスピーチを継続する事例	自分の考えをもち分かりやすく話そう	(1)ア(ii) (2)イ	①
2	国語総合	小説を設定を変えて書き換える事例	小説の表現の特色を捉えよう	(1)ア(ii) (1)イ(i)	⑤
3	国語総合	模擬裁判を活用して小説を読み深める事例	異なる立場から小説を読み深めよう	(1)イ(ii) (2)ア	⑥
4	国語総合	古典(古文)の翻案映像を活用し登場人物へメッセージを送る事例	古文と翻案映像とを比較して古典への興味・関心を広げよう	(2)イ	①
5	国語総合	古典(古文)を脚本に書き換える事例	歴史物語に描かれた情景や人物の表現の仕方を捉えよう	(1)ア(i) (ii)	②
6	国語総合	古典(漢文)の内容を新聞の形式でまとめる事例	漢文の内容を新聞にしてみよう	(1)ア(i) (ii)	④
7	国語表現	他教科と連携し、相手や目的に応じた文章を書く事例	収集した情報を効果的に報告書にまとめよう	(1)ア(i) (ii)	②
8	現代文A	学校図書館を活用しブックトークの形式で図書資料を紹介する事例	進路を考える上で参考となった図書資料を紹介しよう	(1)ア(ii) (1)イ(i)	⑤
9	現代文A	海外で翻訳出版された小説について発表する事例	海外に輸出された日本の小説を読もう	(1)ア(i) (1)イ(i)	③
10	現代文A	テーマを設定して小説を読み比べ、批評文を書く事例	恋愛と友情をテーマにした文章を読み比べ、言語文化について理解を深めよう	(1)イ(i)	④
11	現代文B	話し合いや発表を通して小説の読みを深める事例	小説を読んで作者の表現意図を捉えよう	(1)イ(i) (ii)	⑥
12	現代文B	テレビドラマにすることを想定して小説を読み味わう事例	テレビドラマに関する、新聞のテレビ欄の記事を書こう	(1)ア(ii) (1)イ(i)	②
13	現代文B	ICTを活用し文字、音声、画像などのメディアを使って表現する事例	ICTを用いて発表資料を作ろう	(1)ア(ii) (1)イ(i)	⑤
14	古典A	表現を集め、調べたことをクイズ形式で報告する事例	季語でクイズ大会を開こう	(1)ア(i) (ii)	⑤
15	古典A	百人一首を通して伝統的な言語文化に親しむ事例	百人一首カルタを楽しもう	(1)ア(i) (2)イ	①
16	古典B	古典の現代語訳を読み比べる事例	現代語訳を活用して源氏物語を読み味わおう	(1)イ(i) (ii)	④
17	古典B	古典の言葉の意味の変遷などを調べ、報告する事例	「色の名」について調べ、報告文にまとめよう	(1)ア(i) (1)イ(i)	③

「分類」「活動」の見方は、59ページを参照

- ※ 分類・・・言語の役割を踏まえ言語活動を分類したもの
- ※ 活動・・・思考力・判断力・表現力等を育むための学習活動

【学習活動の概要】

<p>1 単元名 自分の考えをもち分かりやすく話そう</p>										
<p>2 単元の目標 (国語科のそれぞれの事例において、「単元の目標」は「単元の評価規準」を兼ねている。 「関心・意欲・態度」の目標は、当該単元で最も重点を置く内容について設定している。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話題について様々な角度から検討して自分の考えをもととする。</li> <li>・ 根拠を明確に示して意見を述べようとする。 (以上、関心・意欲・態度)</li> <li>・ 話題について様々な角度から検討して自分の考えをもつ。</li> <li>・ 根拠を明確に示して意見を述べる。 (以上、話す・聞く能力)</li> <li>・ 文や文章の組立て、語句の意味、用法を理解する。 (知識・理解)</li> </ul>										
<p>3 取り上げる言語活動と教材</p> <p>(1) 言語活動 1年間を通じて、その時々話題を選び継続的にスピーチすること。</p> <p>(2) 教材 新聞、図書資料、インターネット教材など</p>										
<p>4 単元の具体的な評価規準</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>関心・意欲・態度</th> <th>話す・聞く能力</th> <th>知識・理解</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>話す内容に対する認識や態度を自らの内部に形成しようとしている。 自分の考えが、根拠から妥当な論理の展開で導き出されていることを相手に分かりやすく示そうとしている。</td> <td>話す内容に対する認識や態度を自らの内部に形成している。 自分の考えが、根拠から妥当な論理の展開で導き出されていることを相手に分かりやすく示している。</td> <td>話すこと・聞くことに必要な文や文章の組立てについて理解している。 話すこと・聞くことに必要な語句の意味、用法について理解している。</td> </tr> </tbody> </table>			関心・意欲・態度	話す・聞く能力	知識・理解	話す内容に対する認識や態度を自らの内部に形成しようとしている。 自分の考えが、根拠から妥当な論理の展開で導き出されていることを相手に分かりやすく示そうとしている。	話す内容に対する認識や態度を自らの内部に形成している。 自分の考えが、根拠から妥当な論理の展開で導き出されていることを相手に分かりやすく示している。	話すこと・聞くことに必要な文や文章の組立てについて理解している。 話すこと・聞くことに必要な語句の意味、用法について理解している。		
関心・意欲・態度	話す・聞く能力	知識・理解								
話す内容に対する認識や態度を自らの内部に形成しようとしている。 自分の考えが、根拠から妥当な論理の展開で導き出されていることを相手に分かりやすく示そうとしている。	話す内容に対する認識や態度を自らの内部に形成している。 自分の考えが、根拠から妥当な論理の展開で導き出されていることを相手に分かりやすく示している。	話すこと・聞くことに必要な文や文章の組立てについて理解している。 話すこと・聞くことに必要な語句の意味、用法について理解している。								
<p>5 単元の指導計画</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>次</th> <th>学 習 活 動</th> <th>言語活動に関する指導上の留意点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>第1次</td> <td>本単元では、授業の最初の時間を使い、週2回、1～2名の生徒がスピーチをする。 ＜1回目のスピーチ＞ ・関心があり、場にふさわしい話題について検討し、自分の考えをもって話す。 ・聞き手は、相互評価カードなどに記入する。</td> <td rowspan="2"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチの時期の差異を考慮して相互評価を工夫し、スピーチを聞いて、次の自分のスピーチに生かしたいところを見付け、それをノートに記入させる。</li> <li>・長期間にわたる言語活動となるので、関心や意欲が低下しないよう、1回目の目標の実現の状況を踏まえ、2回目の目標や、スピーチの形態を工夫する。</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td>第2次</td> <td>＜2回目のスピーチ＞ ・自分の意見の根拠を明確に示して、話の内容がよく分かるよう工夫して話す。 ・聞き手は、相互評価カードなどに記入する。</td> </tr> </tbody> </table>			次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点	第1次	本単元では、授業の最初の時間を使い、週2回、1～2名の生徒がスピーチをする。 ＜1回目のスピーチ＞ ・関心があり、場にふさわしい話題について検討し、自分の考えをもって話す。 ・聞き手は、相互評価カードなどに記入する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチの時期の差異を考慮して相互評価を工夫し、スピーチを聞いて、次の自分のスピーチに生かしたいところを見付け、それをノートに記入させる。</li> <li>・長期間にわたる言語活動となるので、関心や意欲が低下しないよう、1回目の目標の実現の状況を踏まえ、2回目の目標や、スピーチの形態を工夫する。</li> </ul>	第2次	＜2回目のスピーチ＞ ・自分の意見の根拠を明確に示して、話の内容がよく分かるよう工夫して話す。 ・聞き手は、相互評価カードなどに記入する。
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点								
第1次	本単元では、授業の最初の時間を使い、週2回、1～2名の生徒がスピーチをする。 ＜1回目のスピーチ＞ ・関心があり、場にふさわしい話題について検討し、自分の考えをもって話す。 ・聞き手は、相互評価カードなどに記入する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチの時期の差異を考慮して相互評価を工夫し、スピーチを聞いて、次の自分のスピーチに生かしたいところを見付け、それをノートに記入させる。</li> <li>・長期間にわたる言語活動となるので、関心や意欲が低下しないよう、1回目の目標の実現の状況を踏まえ、2回目の目標や、スピーチの形態を工夫する。</li> </ul>								
第2次	＜2回目のスピーチ＞ ・自分の意見の根拠を明確に示して、話の内容がよく分かるよう工夫して話す。 ・聞き手は、相互評価カードなどに記入する。									

【解説】

【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである。

ア 話題について様々な角度から検討して自分の考えをもち、根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べること。  
「国語総合」 内容「A話すこと・聞くこと」の(1)

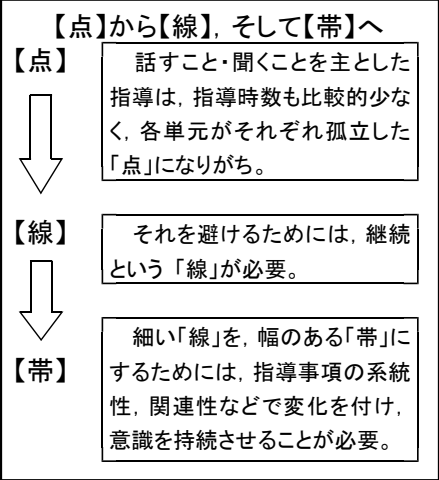
この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ア 状況に応じた話題を選んでスピーチしたり，資料に基づいて説明したりすること。  
「国語総合」 内容「A話すこと・聞くこと」の(2)

【言語活動の充実の工夫】

○ 「帯単元」で学習しているという意識を持続させる(【点】から【線】，そして【帯】へ)

「A話すこと・聞くこと」の指導は，大きな間隔をあけて実施されたり，一定の時期に集中して実施されたりすることが多い。そこで本事例のように，週2回程度，国語の授業の最初に短時間，話すこと・聞くことを意図的，計画的に指導する時間を設け，スピーチという言語活動を継続して行うことは，生徒に，この領域の学習をしているという意識を持続させ，音声言語に係る言語運用の能力を高めることに資する。



○ 「帯単元」ゆえの指導上の留意点

仮に，週2回，1～2名ずつスピーチするとしても，最初の生徒と，最後の生徒とでは，数か月という単位で時間の差が生じる。生徒の学習意欲には，大きな違いが出る可能性がある。そこで，本事例では2つの工夫をしている。

一つ目は，他の人のスピーチを聞き，それを自分の表現に不断に生かす指導の充実である。そのためには，聞き取りメモや，相互評価表の活用が有効である。

二つ目は，一巡する間に身に付けたことを生かす場として，2回目のスピーチを設定することである。このことは，生徒の再挑戦の機会になる。その際，生徒の実態を踏まえ，本事例のように「根拠を明確にする」という1回目では重視していない指導事項に注意させたり，新たな指導事項を取り上げたりすること，形態をグループによるスピーチに変化させることなどでマンネリ化を防ぎ，生徒の言語運用の能力を更に高みに導くようにすることが大切となる。なお，1回目に十分満足できる状況と判断した生徒については，スピーチ原稿の提出で代替してもよい。

○ 話題について調査し検討することを大切にする

話題については，日常生活の出来事のみならず，幅広く，時事的な話題，科学的な話題などを取り上げ，それらについて調査し，検討した結果を話すよう指導したい。必要に応じて資料を作成することも求めたい。他の人が調査，検討した話題についてのスピーチを聞くことも含め，この活動は，生徒の視野や知識を広げ，様々な話題について討論したり，様々な文章を読んだり，書いたりする学習活動の基盤となるものの見方，考え方などを育成することにつながる。

【学習活動の概要】

1 単元名 小説の表現の特色を捉えよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読もうとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読む。 (読む能力)</li> <li>・ 国語における表現の特色などを理解する。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 小説を設定を変えて書き換えること。ポップ(広告)を作ること。		
(2) 教材 「羅生門」(芥川龍之介)		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
文学的な文章を、表現の技法や語句の使い方など書き手の工夫を捉えて読もうとしている。	文学的な文章を、表現の技法や語句の使い方など書き手の工夫を捉えて読んでいる。	小説には、小説固有の表現の技法や語句の使い方などがあることについて理解している。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	本単元では、「羅生門」を、設定を一つだけ変えてオリジナルな作品を創作し、その作品のポップを制作する。  ・「羅生門」を読み、内容を捉える。 ・作者が工夫していると感じた表現に傍線を付ける。	・書き換えることを通じて表現の工夫や特色に気付く、という学習のねらいを意識させる。  ・生徒の実態に応じて、表現の特色などについて指導する。
第2次	・作品中の設定を一つだけ変え、作者の表現の工夫を活用しながら「羅生門」を書き換える。(グループ) ・書き換えた作品のポップを作る。(グループ)	・最初にあらすじを書き、それを基に書き換えさせる。  ・生徒の実態に応じて、ポップの実物を示す。
第3次	・作品、ポップを交流し、相互評価する。 ・原文と書き換えた作品とを比較し、表現の違いや印象の違いをまとめる。	・作成したポップについては、投票によって優秀なものを表彰すると、学習への関心・意欲を喚起することにつながる。

## 【解説】

### 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである。

ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。

「国語総合」 内容「C読むこと」の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。

「国語総合」 内容「C読むこと」の(2)

### 【言語活動の充実の工夫】

#### ○ 内容を捉えるだけでは、読みとして十分ではない

文章を読むときには、単に内容を捉えるだけではなく、その文章の表現の特色に注意することが大切である。内容についての理解と表現についての理解とが相まって、初めて深い読みに到達する。このことは、生徒の表現の能力の育成にも欠くことができない大切な学習である。

文章の形態には、文学的文章（詩歌、小説、随筆、戯曲など）、論理的文章（説明、論説、評論など）、実用的文章（記録、報告、報道、手紙など）などがある。文章の内容や形態ごとに、それぞれに固有な表現の特色が考えられる。その特色を捉えることを抜きにしては、読みは深まらない。本事例において取り上げている小説の場合の特色としては、長編小説か短編小説かの違いによるもの、書かれた時代の違いによるものなどのほか、描写や会話などの中における、擬人法をはじめとした比喩、反復、倒置などの表現の技法、感覚的な語句や表現の使用、文の長短などという、書き手の工夫によるものなどがある。これらは、書き換えるという言語活動を通して捉えることができるが、それに加えて、書き換えた作品のポップを作ることによって、一層明確に原作品の表現の特色を意識することができる。

#### ○ 書く活動を通して、読むことについて指導する

読むことの指導事項を身に付けさせるためには、読むという言語活動だけでは不十分である。

本事例のように、生徒自身が小説を書き換える、ポップを作るといった言語活動を通して「読むこと」について指導することで、文章を、表現に即して、分析的に読む必要が生じ、文章の内容や表現を一層深く捉えることができ、「文学的文章を、表現の技法や語句の使い方など書き手の工夫を捉えて読む」ことに資する。

#### ○ 翻案が果たしてきた機能を意識する

我が国の言語文化においては、翻案が言語文化の創造の担い手として機能してきた。古典においては、和

歌の本歌取りや謡曲などがその産物といえる。近世や近代以降の小説の多くもまた我が国や中国の伝統的な言語文化を基にしていることは言うまでもない。本事例で取り上げた「羅生門」も「今昔物語」の翻案である。このような背景を踏まえ、翻案という言語活動を通して、言語文化への理解を深め、読書活動に生かしていくことも大切である。



【生徒が作成したポップの例】

【学習活動の概要】

1 単元名 異なる立場から小説を読み深めよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>文章に描かれた人物，心情などを表現に即して読み味わおうとする。<span style="float: right;">(関心・意欲・態度)</span></li> <li>文章に描かれた人物，心情などを表現に即して読み味わう。<span style="float: right;">(読む能力)</span></li> <li>語彙を豊かにする。<span style="float: right;">(知識・理解)</span></li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 検察官，弁護人という異なった立場で，裁判員制度による模擬裁判を行うこと。		
(2) 教材 「羅生門」(芥川龍之介)		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
文章に描かれている人物の心情を表現に即して読み，異なる立場から読み深めようとしている。	文章に描かれている人物の心情を表現に即して読み，異なる立場から読み深めている。	正しく理解し，使いこなせる言葉の数を増やしている。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	<p>本単元では，教材としての小説を，模擬裁判の形式を取り，検察官と弁護人という異なる立場から読み深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>小説「羅生門」を読み，下人の行動と心情を捉える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小説を教材とし，模擬裁判を行うという学習の見通しをもたせ，検察官，弁護人それぞれの役割をイメージして，異なる立場から読ませる。</li> <li>生徒の実態に応じて，表現の特色や，語句や語彙などについても指導する。</li> </ul>
第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>下人の行動と心情の変化を整理し，下人の罪について，検察官，弁護人という異なる立場から話し合う。(グループ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>検察官，弁護人それぞれの立場から自分の考えや主張をもたせるとともに，根拠となる表現を明確にさせる。</li> </ul>
第3次	<ul style="list-style-type: none"> <li>一つのグループが検察官，弁護人のいずれかの役割を担い，他の生徒は裁判員となって模擬裁判を行う。(全体)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>可能であれば，いずれのグループにも3つの役を経験させ，相互評価させる。</li> </ul>
第4次	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し合いや模擬裁判を基に，自分の読みをまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な考えを聞き，自分はどの立場をとるかを明確にさせる。</li> </ul>

## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである（主に下線部）。

ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。

「国語総合」 内容「C読むこと」の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ウ 現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合うこと。

「国語総合」 内容「C読むこと」の(2)

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 他教科での学習を生かす

言語活動を、国語科で学習したことに限定するとその幅や奥行きが狭くなってしまう。生徒は、各教科等で様々な内容を、体系的に継続して学んでいる。それをどのように国語科の言語活動に生かしていくかを考える必要がある。本事例で取り上げた模擬裁判については、公民科での学習を生かすことができる。ただ、他教科との連携という点からは、事前に公民科の教師に当該内容が既習かどうかを確認し、国語科で模擬裁判の形で言語活動を行うことを伝える程度でも十分であろう。なお、言語活動は既習の事項を取り上げることが原則であり、例えば、裁判員制度について国語科で新たに指導し、それを言語活動として取り上げるなどということは想定していない。

## ○ 模擬裁判という形式で、論理的な思考力を育てる

本事例で取り上げた指導事項「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」についての指導では、情緒的な読みにもみ流されるのではなく、構成や展開、一つ一つの描写などにも書き手の論理が働いていることを意識させると、文章の読みが深まることが多い。本事例では、文章の内容や表現を根拠とする論理的、批判的な思考による読みの深まりを意図し、「読む能力」の具体的な評価規準を「文章に描かれている人物の心情を表現に即して読み、異なる立場から読み深めている。」としている。この「異なる立場」を生徒がイメージしやすくなるよう模擬裁判という言語活動を取り上げ、検察官と弁護士という全く相反する立場から登場人物の心情を捉える学習活動を展開している。なお、この言語活動は、主人公の葛藤がテーマとなっている作品、「舞姫」、「こころ」、「山月記」などと組み合わせることも可能である。

## ○ 固定観念から脱却する

「羅生門」を教材とした指導では、従前、「羅生門」ではこのことを教えたいという教師の意識が強すぎるあまり、生徒に身に付けさせたい国語の能力を明確に意識せず、教材の内容理解のみに焦点を当てた授業が行われがちであった。そのため、教師の意気込みとは裏腹に、生徒の読みが深まっていない状況も見られた。生徒同士の学び合いを促す仕掛けを作ることも疎かになりがちであった。指導の醍醐味は、生徒の学習意欲を喚起するような言語活動を取り上げ、生徒がそれに目を輝かせて取り組み、国語の能力が身に付いたと生徒が感得していくところにある。そこでは、指導事項や言語活動にふさわしい教材を見付け、それをどうアレンジするかという、教師の力量、意気込みも問われることになる。そこで本事例集では、3つの異なる指導事項、言語活動について、「羅生門」を教材とするものを示している。

【学習活動の概要】

1 単元名 古文と翻案映像とを比較して古典への興味・関心を広げよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古典を読み伝統的な言語文化への興味・関心を広げようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 幅広く本や文章を読み、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。 (読む能力)</li> <li>・ 古典を読み伝統的な言語文化への興味・関心を広げる。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 作品を読み比べ、登場人物へのメッセージを書くこと。		
(2) 教材 堤中納言物語「虫めづる姫君」、アニメーション映画「風の谷のナウシカ」		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
古典と翻案された映像それぞれに表れている個性と価値などから、古典のよさに気付こうとしている。	古典と翻案された映像の意図を捉え、共感したり、疑問に思ったり、思索したりしている。	古典と翻案された映像それぞれに表れている個性と価値などから、古典のよさに気付いている。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	本単元では、教材として、古典の本文と、その作品から着想を得て翻案された映像とを取り上げ、登場人物へメッセージを送る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古典の翻案を視聴することで、古典が身近な生活の中に息づいていることを実感させ、古典の中の人物にメッセージを送ることに必然性をもたせる。</li> <li>・ 人物像を捉えるために、例えば、感情を表す形容詞に着目し、その感情が行動を促していることに気付かせるなど、生徒の実態に応じた読み方を示す。</li> <li>・ メッセージは、例えば、どういう点が支持できて、その理由は何なのかを、本文中の表現を根拠として書くようにさせる。</li> </ul>
第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「風の谷のナウシカ」の視聴後、「虫めづる姫君」の原文を読み、映像との共通点や相違点を話し合いながら、内容の大体を捉える。</li> <li>・ 作品が書かれた当時における貴族の日常生活なども参考にしながら、虫めづる姫君の、ものの見方、感じ方、考え方の特徴をまとめる。</li> <li>・ 虫めづる姫君へ、応援メッセージ又は忠告メッセージを書く。</li> </ul>	
第3次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ メッセージを交流し自分の読みを確認する。</li> </ul>	



## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例で重視する事項は、次のとおりである（主に下線部）。

ア(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。

「国語総合」 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の(1)

この事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。

「国語総合」 内容「C読むこと」の(2)

(参考)〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の指導と評価

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕については「知識・理解」で評価する。本事例では、「知識・理解」を最も重視して指導することから、「関心・意欲・態度」の目標、評価規準も、この内容について設定している。なお、本事例では、読む能力として、「C読むこと」の「オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。」も取り上げて指導している。

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 古典についての、興味・関心を広げることが大切である

古典を読むためには、その基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視し過ぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで、指導においては、古典の原文のみを取り上げるのではなく、本事例のように、言語活動や教材にも工夫を凝らしながら、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を展開し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高める必要がある。そして、そのような指導を通して、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせていくことが大切である。

## ○ 古典の教材は、古典の原文だけではない

「国語総合」の古典の教材には、古文と漢文の原文だけではなく、古典に関連する近代以降の文章を必ず含めなければならない。古典に関連する近代以降の文章とは、古典について解説した近代以降の文章や、古典を素材にしたり翻案したりした近代以降の文章を指す。本事例で取り上げた、翻案された映像などもそれに含まれる。これらの中には、古典の魅力や現代的な意義などを平易に伝えるものが数多くある。適切な分量でこれらを扱うことで、古典の学習活動がより魅力的なものとなる。

## ○ 古典の指導も、言語活動を通して指導事項について指導する

「国語総合」の「C読むこと」の指導事項（内容の(1)）は、近代以降の文章だけでなく、古典にも該当する。古典の学習は、現代語訳や文法的な説明に終始するものであってはならない。古典を読むことへの関心や意欲を喚起するためには、古典を学ぶことの意義を認識させることが大切である。そのためにも、近代以降の文章と同様に、多様な言語活動を通して指導する必要がある。また、その言語活動も、読むという活動だけでは不十分である。本事例で取り上げた、登場人物へのメッセージを書くなどの、表現する言語活動を通して指導することも大切となる。

【学習活動の概要】

1 単元名 歴史物語に描かれた情景や人物の表現の仕方を捉えよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図を捉えたりしようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図を捉えたりする。 (読む能力)</li> <li>・ 文や文章の組立て、語句の意味、用法などを理解している。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 古典を脚本に書き換えること。		
(2) 教材 大鏡「肝試し」(原文, 現代語訳)		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
文章の構成や展開を確かめ、情景や心情が効果的に表現できているかどうかを考察しようとしている。	文章の構成や展開を確かめ、情景や心情が効果的に表現できているかどうかを考察している。	古典を読むことに必要な文や文章の組立て、語句の意味、用法について理解している。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
	本単元では、歴史物語の一節を脚本に書き換える。	・ 生徒の実態に応じて脚本を例示するなどして学習の見通しをもたせ、学習に対する関心や意欲を高める。
第1次	・ 現代語訳を活用しながら、物語の内容の大体を捉える。(全体)	・ 教師が原文を読み聞かせるなどの工夫をし、内容を捉えやすくする。
第2次	・ 現代語訳を活用しながら、脚本を作る。(グループ) ・ 脚本の「読み合わせ」を互いに聞き、相互評価を行う。(全体)	・ 会話部分だけではなく、地の文も可能な限り会話に直させる。 ・ ト書きの効果についても注意させる。
第3次	・ 原文を脚本と比較し、原文の構成や展開の巧みさ、情景や心情の効果的な表現などについてまとめる。(グループ, 個人)	・ 原文と脚本とを比べて読むことで、古典の原文のよさについて気付かせる。

## 【解説】

### 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである。

エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。 「国語総合」 内容「C読むこと」の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。 「国語総合」 内容「C読むこと」の(2)

### 【言語活動の充実の工夫】

#### ○ 言語活動は既に指導している内容である

取り上げる言語活動は既に指導している必要がある。つまり、脚本にするという言語活動の前提としては、戯曲という文学的な文章の一つの形態に触れている必要がある。

脚本化という翻案をする言語活動においては、古典や現代語訳を自分の知識、思考、体験などと照合させながら繰り返して読むことが求められる。このことは、読み手の認識の変容を促すとともに主体的な読みをさせることにもなり、「文章の構成や展開を確かめ、情景や心情が効果的に表現できているかどうかを考察」することに資する。

#### ○ 教材として取り上げる科目を固定的に考えない

「大鏡」は、物語の内容として魅力があり「国語総合」で取り上げたいものであるが、文章としての難度などの点から、従前、古典の選択科目で取り上げられることが多かった。しかし、現代語訳を前提とする古典の授業の旧弊から脱し、本事例のように言語活動を通して指導することで、「国語総合」でも取り上げることができる。古典を教材として、「文章の構成や展開を確かめ、情景や心情が効果的に表現できているかどうかを考察」するためには、一定の長さの文章が必要となる。そこで、本事例のように現代語訳などを適切に用いることにより、教材選択の幅も広がる。

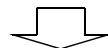
#### ○ 物語の内容を生き生きと描く

脚本の特色を生かし、地の文を会話に直してみたり、会話から読み取れる状況をト書きにしたりすることで、情景や、登場人物の心情がより生き生きとしてくる（右の例を参照）。

また、学習の時点までの日本史の学習経験なども踏まえ、必要であれば、作品世界を支える政治制度などの歴史的・社会的背景、生活様式、価値観などを、文字資料だけではなく視覚的な資料で補うと、読みを一層深め、広げることにつながる。

#### 【原文】

帝、さうざうしと思し召しけむ、殿上に出でさせおはしまして遊びおはしけるに、人々、物語申しなどし給うて、昔おそろしかりけることどもなどに申しなり給へるに、……



#### 【脚本】

帝：「ふう、やることもないし、実につまらん。

あいつらと話でもするか。」

殿上人たちがわいわいと楽しげに何か話をしているところに、帝がお出ましになる。

殿上人1：「そういえばこの間、ある人の家が出るのが夜明け前になってしまっただけか、迎えの車が来なかったものだから歩いて帰ることにしたんだ。月明かりもない真っ暗な道を歩いていると、なんだか気味の悪い声が聞こえてきて、思わず走り出してしまったよ。」

殿上人2：「実は、私も同じようなことがあったのですよ……」

#### 【生徒が作成した脚本例】

【学習活動の概要】

1 単元名 漢文の内容を新聞にしてみよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章の内容を必要に応じて要約したり詳述したりしようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 文章の内容を必要に応じて要約したり詳述したりする。 (読む能力)</li> <li>・ 訓読のきまりを理解する。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 漢文に書かれている情報を取捨選択して、新聞の形式でまとめること。		
(2) 教材 「鶏鳴狗盗」「臥薪嘗胆」「管鮑之交」「刺客荊何」「死諸葛走生仲達」など		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
目的に応じて、文章をまとめたり、詳しく解説や説明をしたりしようとしている。	目的に応じて、文章をまとめたり、詳しく解説や説明をしたりしている。	漢文を読むことに役立つ、訓読のきまりを身に付けている。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	本單元では、漢文の複数の教科書教材を読み、その内容を新聞の形式で表現する。 ・現代語訳も活用しながら本文を読み、歴史的背景、人物関係、人物の言動などの大体を捉える。	・新聞の形式で表現するのにふさわしい内容の漢文を取り上げる。 ・第1次では、第2次以降の学習の見通しをもたせ、それに資するよう本文を読ませる。
第2次	・文章中から事件や歴史的背景を取り上げ、それに関わる人物の行動や考え方などをまとめる。(個人、グループ) ・トップ記事(大見出し)の決定や記事の紹介の仕方などを話し合い、新聞を作成する。(グループ)	・第2次では、新聞の形式で表現することが、文章の要約や詳述という読むことの学習であることを認識させる。 ・必要なグループには、新聞の編集に関する補助資料を提示する。
第3次	・各グループの新聞を交流する。(全体) ・質疑応答したことなども踏まえて、要約の仕方や詳述の仕方について確認し、修正点があれば修正する。(グループ、個人)	・恣意的な表現にならないよう、文中の表現を根拠にしたり引用したりするよう助言する。 ・制作に当たってはICTも活用させる。

## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである（主に下線部）。

イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり，必要に応じて要約や詳述をしたりすること。  
「国語総合」 内容「C読むこと」の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

イ 文字，音声，画像などのメディアによって表現された情報を，課題に応じて読み取り，取捨選択してまとめること。  
「国語総合」 内容「C読むこと」の(2)

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 要約、詳述は「読むこと」の指導事項である

要約や詳述は話したり書いたりという活動を伴うが、学習指導要領では読むことの指導事項として示している。要約とは、文章の要点を押さえながら短くまとめることである。文章全体の要約が必要なのか、それとも特定の項目に関してまとめることが必要なのかなど、目的に応じて要約の仕方は異なってくる。詳述とは、文章の難解な部分あるいは含蓄のある部分などを詳しく説明したり解説したりすることである。また、抽象的な事柄を具体例を示しながら分かりやすく説明したり、同じ文章の中から関連する表現や内容を取り上げて説明したりすることなどという。

## ○ 新聞を制作するには総合的な言語能力が必要である

まず、トップ記事やレイアウトを考えることは、何を情報として取り上げ、何を強調し、何を伝えたいかを強く意識することにつながる。その前提として、本事例では、教材としての漢文を的確に読み取ることが求められる。

次に、どのように伝えるかを考える場面では、記事、インタビュー、コラム、社説、広告など、新聞における様々な表現形式から、伝えたい内容を効果的に伝える方法を選ぶ力が求められる。

そして、それぞれの表現形式に即して、文章を要約したり詳述したりする力が必要となる。

また、新聞を制作する過程で、自分たちが作る新聞の広告を作成させる活動を取り入れると、

機知に富んだ宣伝やキャッチフレーズを考える中で、豊かな発想力、想像力を育むこともできる。



【漢文に関する新聞の例】

## ○ 古典の指導を改善する

古典を教材とした読むことの学習指導で、読むという言語活動だけを行っていても、訓詁注釈に重きが置かれてしまい、読むことの指導事項を十分に身に付けさせることはできない。本事例のように、新聞の制作という表現する言語活動をさせることが、生徒の古典への関心を高め、古典の指導を改善するきっかけとなり、読む能力を幅広く育成することになることを意識したい。

なお、読むことの指導における、話す、書く（表現する）という言語活動は、勝手気ままに自分の考えを話したり、書いたりすればよいというものではない。そこでは、文章中の表現を根拠とし、論理的に考え、伝えることの大切さを常に意識させる必要がある。

【学習活動の概要】

1 単元名 収集した情報を効果的に報告書にまとめよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりしようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりする。 (書く能力)</li> <li>・ 相手に的確に伝わる表現の特色について理解を深める。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 相手や目的に応じて、報告のための文章をまとめること。		
(2) 教材 福祉施設実習の報告書		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
福祉施設実習において、日報や報告書を書くのに必要な情報をメモし、それを基に、自分の考えをまとめたり深めたりしようとしている。	福祉施設実習において、日報や報告書を書くのに必要な情報をメモし、それを基に、自分の考えをまとめたり深めたりしている。	必要な事柄が、相手に分かりやすく伝わる表現の特色について理解を深めている。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	<p>本単元では、福祉科と連携して、福祉施設実習の日報や報告書を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 箇条書きや記号を用いるなど効果的にメモを取る方法、メモを基に日報を書く方法を学ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 福祉科と共同で指導計画を立案し、それぞれの教科で指導する内容を確認する。</li> <li>・ 必要な情報を漏れなく書き留める方法を工夫させる。</li> <li>・ メモを基にした日報のまとめ方は、福祉科と連携して指導する。</li> </ul>
福祉科 第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 福祉施設実習で、日報を書く。</li> <li>・ 日報を整理し、報告書の中心となる話題を検討し、報告書にまとめる。(個人)</li> <li>・ 報告書をグループで輪読し、良い点や改善点を相互評価する。(グループ)</li> <li>・ 報告書を推敲し、製本する。</li> </ul>	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実習では、メモを活用しながら日報にまとめさせる。</li> <li>・ 前年度の報告書を示し、メモや日報を資料としたまとめ方を指導する。</li> </ul>

## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本指導事例の国語としての指導事項は、次のとおりである。

ア 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりすること。  
「国語表現」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

エ 相手や目的に応じて、紹介、連絡、依頼などのための話をしたり文章を書いたりすること。  
「国語表現」 内容の(2)

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 情報を的確にメモする技能を身に付ける

第1次では、相手や目的に応じて文章を書くためのメモの取り方の基本を、国語科が「国語表現」の授業で指導し、学校行事などの様々な機会を活用し、指導したことが効果的に生徒に定着しているかを確認する。聞き取りのための視点などを整理した表をあらかじめ作成し、生徒がメモを取るポイントを明確にさせる工夫をする。最初は、A4サイズの表を使ってメモを取らせるため、写真のようなボードを持たせ書き取りやすくする。この学習活動を、福祉施設実習の際の情報収集の練習と捉え、メモを基に福祉施設実習の日報を書く指導を、福祉科の教員と連携して行う。



## ○ 自信と見通しをもって実習に臨む

第1次の学習を基に、生徒は自信をもって福祉施設実習に臨むことができる。実習期間中は、福祉科の教員が巡回指導【ボードを使ってメモを取る様子】を行い、日報を確認するとともに、日報を活用して報告書がまとめられるように指導する。なお、生徒には、前年度までの福祉施設実習の報告書を事前に読ませ、実習終了後の見通しをもたせている。

## ○ まねることで書く力を伸ばす

本事例の指導では、前年度までの生徒が作成した日報や報告書を提示している。このことにより、日報や報告書のプロトタイプ（原型、模範）を生徒は知ることができる。書くことが苦手な生徒であっても、過去の生徒の成果をまねてまとめることができ、書くことへの抵抗感を和らげる効果がある。書き上がった報告書については、グループで輪読しながら、良い点、改善点を付箋の色を変えて記入させる。コメントを記入し相互に指摘し合うことで、それまで自分が見落としていたことに気がつくようになり、表現が一層改善される。

## ○ 報告書は、社会において活用できる国語の力を育成するのに適している

社会において活用できる国語の力を育成するには、体験したことなどを言語化して分析し、報告書などにまとめる学習が効果的である。このことは、各学科に共通する教科、専門教科等を問わず、各教科等と連携して指導できる。その際、単に報告書を書くというのではなく、本事例のように、その準備として効果的なメモの取り方を学び、日報を書き、それを活用して報告書にまとめるという一連の学習をさせることは、相手や目的に応じた文章を書く力の育成に資する。

【学習活動の概要】

1 単元名 進路を考える上で参考となった図書資料を紹介しよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章に表れたものの見方, 感じ方, 考え方を読み取り, 人間, 社会, 自然などについて考察しようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 文章に表れたものの見方, 感じ方, 考え方を読み取り, 人間, 社会, 自然などについて考察する。 (読む能力)</li> <li>・ 言語文化について理解を深める。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 自分の進路を考える上で参考となった学校図書館の図書資料をブックトークの形式で紹介すること。		
(2) 教材 進路を考える上で参考となる図書資料 (評論, 解説, 伝記など)		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
自分が選んだ本の書き手の意図を捉え, 共感したり思索したりして, 自分の考えを形成しようとしている。	自分が選んだ本の書き手の意図を捉え, 共感したり思索したりして, 自分の考えを形成している。	自分の考えを形成する上で参考となる本のもつ価値について理解を深めている。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	本單元では, 学校図書館を活用し, 自分の進路について考えるのに参考となった図書資料をブックトークの形式で紹介する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ホームルーム担任と連携し, 特別活動における指導などを通して, あらかじめ生徒の進路希望を把握する。</li> <li>・ 生徒の進路希望を踏まえ, 学校図書館担当者と連携して, 参考となる図書資料を整備する (生徒の実態などに応じて特設コーナーを設ける。)</li> <li>・ 複数の図書資料から必要なものを選ばせる。</li> <li>・ 単元の目標に沿った相互評価の項目を設定する。</li> </ul>
第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校図書館で選んだ自分の進路に関わる図書資料を読み, 自分の進路とどのように関係するのかを考え, メモにまとめる。</li> <li>・ メモを基に, どのような内容をブックトークの形式で紹介するかを考える。</li> <li>・ ペアでブックトークを試み, 改善が必要な点を見付け, 改善する。</li> </ul>	
第3次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ クラスでブックトークを行い, 相互評価する。</li> </ul>	



## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである。

ア 文章に表れたものの見方、感じ方、考え方を読み取り、人間、社会、自然などについて  
考察すること。 「現代文A」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ア 文章の調子などを味わいながら音読や朗読をしたり、印象に残った内容や場面について  
文章中の表現を根拠にして説明したりすること。 「現代文A」 内容の(2)

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 言語活動が円滑に展開できるように環境を整備する

本事例では、ホームルーム担任と連携して生徒の進路希望について把握すると同時に、学校図書館担当者と連携して、進路を考えることに資する図書資料や情報などを整理し、生徒が利用しやすい環境を整えることが、言語活動を円滑に展開する前提となる。また、生徒が自らの進路について積極的に考えるよう意図的・計画的に指導していることも大切な前提である。なお、資料を入手するには、生徒にインターネットを活用させることも有効であるが、その際には、情報の信頼性の判断、得た情報の活用方法（引用の仕方）などの理解が必要となる。

## ○ カードや付箋を活用して情報を収集しまとめる

図書資料を選び、読んだ後は、自分の進路を考える上で参考となった情報を取り出し、整理する活動が求められる。その際、カードや付箋を活用すると効果的である。具体的には、右の「書き出す情報」を参考に、一つずつカードや付箋に書き出させる。その際、②に

## 【書き出す情報(例)】

- ① 読んだ作品についての基本情報（作者名・書名・発表年・出版社など）
- ② 自分の進路を考える上で参考になったことや、課題として残ったことに関する情報
- ③ 上記のことで是非伝えたい情報

ついては、参考になったことと、課題として残ったこととでカードや付箋を色分けすると、ブックトークで話す内容を考える際に役に立つ。

## ○ メモを基に話す

話す際に、話すための原稿を書くこととそれを読むことになってしまうことが多い。そこで、できるだけ原稿を作成せず、メモだけで話すようにすることも大切である。例えば、「書き出す情報」のカードや付箋を活用して、①から③のような内容のメモを作成し、それに基づいて話させたい。



【ブックトークの様子】

## 【ブックトークに含める内容(例)】

- ① 自分の進路の情報  
自分とはどのような進路希望をもっているのか。なぜ、その希望をもったのか。
- ② 選んだ図書資料の情報  
図書資料の出典と概要。どの部分がどのように参考となったのか、改めて課題となったことは何か。
- ③ 得た情報の活用方法  
課題となったことを、今後どのように解決していくのか。

【学習活動の概要】

1 単元名 海外に輸出された日本の小説を読もう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>文章を読んで、言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解しようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>文章を読んで、言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解する。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 海外に輸出(翻訳出版)された近代以降の日本の小説を読み、考えたことや気付いたことを発表すること。		
(2) 教材 海外に輸出された近代以降の日本の小説、及びそれらについて解説した文章		
4 単元の具体的な評価規準		
	関心・意欲・態度	知識・理解
	海外に輸出された近代以降の日本の小説の表現から、我が国の言語文化の特質を指摘しようとしている。	海外に輸出された近代以降の日本の小説の表現から、我が国の言語文化の特質を指摘している。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	本單元では海外に輸出(翻訳出版)された近代以降の日本の小説を読み、考えたことや気付いたことを発表する。 ・輸出された日本の小説から、読みたい作品を選ぶ。	・第1次では、まず、海外に輸出された日本の小説にはどのような作品があるのかを予想させ、その後、輸出された日本の小説について解説した文章を読ませる。
第2次	・選んだ作品を読み、翻訳作品のタイトルと原作のタイトルとを比較したり、翻訳作品と原作の一部とを対照させたりする。	・第3次では、まず、自分が選んだ小説の中で、翻訳することが難しいと思われる我が国の言語文化独特の表現や内容と思われる部分を抜き出し、付箋などに書き写させる。その後、抜き出した表現を並べ、どういう点が我が国の言語文化に独特なものなのかを考え、まとめさせる。
第3次	・輸出された日本の小説から我が国の言語文化独特の表現や内容を抜き出し、まとめる。	
第4次	・互いの考えを発表し交流する。 ・発表を聞いて新たに知ったことや考えたことをまとめる。	

## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである。

ウ 文章を読んで、言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。  
「現代文A」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

イ 外国の文化との関係なども視野に入れて、文章の内容や表現の特色を調べ、発表したり論文にまとめたりすること。  
「現代文A」 内容の(2)

## （参考）選択科目における評価の観点

選択科目の指導事項は、必修科目である「国語総合」とは異なり、領域別ではなく一括して示している。そこで、指導事項の中身にに基づき評価の観点を決める必要がある。本事例で取り上げている指導事項は「知識・理解」となる。なお、生徒の実態により、読むこと（「現代文A」の場合、内容の(1)のア、イ（前段）、エ（前段）が該当）の目標も同時に設定して意図的、計画的に指導し、その結果を評価してもよい。

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 広い視野で言語活動を取り上げる

本事例で取り上げるのにふさわしいと考えた言語活動例にある「外国の文化との関係なども視野に入れ」るは、調べたり考えたりする際に用いる資料の幅広さを示している。「文章の内容や表現の特色を調べ」るは、調べる対象が、内容、表現の両面にわたることを示している。

本事例では、近代以降、我が国の言語文化が、外国の文化からどのような影響を受け、何を受容してきたのか、一方、外国において我が国の言語文化がどのように受容されているのかなどという視点から、外国でよく受け入れられている我が国の作品の内容や表現の仕方などについて考察する。その際、我が国の文学の外国への紹介が進み、同時代的かつ普遍的に世界で評価されるようになってきていることや、外国人作家による日本語作品、日本人作家による外国語作品が生まれていることにも配慮して指導する必要がある。

## ○ 言語活動にふさわしい教材を選ぶ

教材は、言語活動にふさわしいものを取り上げる必要がある。その際、学習指導要領の当該科目の「教材に関する事項」に留意する必要がある。「現代文A」の教材としては、「特定の文章や作品、文種や形態などについて、まとまりのあるものを中心として適切に取り上げること」が求められている。本事例の場合、「特定の文章や作品、文種や形態」に該当するのが、「海外に輸出（翻訳出版）された小説」ということになる。このような、まとまりのある文章を外国の文化との関係なども視野に入れて読み、文章の内容や表現の特色を調べることが、我が国の言語文化に対する理解を深め、興味・関心を広げ、生涯にわたって読書に親しむ態度を育成することに資する。

## 【海外に輸出されている作品(例)】

『河童』（芥川龍之介）  
『黒い雨』（井伏鱒二）  
『沈黙』（遠藤周作）  
『野火』（大岡昇平）  
『雪国』（川端康成）  
『細雪』（谷崎潤一郎）  
『斜陽』（太宰治）  
『こころ』（夏目漱石）  
『金閣寺』（三島由紀夫）  
『高瀬舟』（森鷗外） など

【学習活動の概要】

1 単元名 恋愛と友情をテーマにした文章を読み比べ、言語文化について理解を深めよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章を読んで、言語文化への理解を深めようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 言語文化についての課題を設定し、様々な文章を読んで探究する。 (読む能力)</li> <li>・ 文章を読んで、言語文化について理解を深める。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 「恋愛と友情の狭間」をテーマにして文章を読み比べ、批評文を書くこと。		
(2) 教材 「こころ」「それから」(夏目漱石), 「友情」(武者小路実篤), 「青い山脈」(石坂洋次郎), 「煤煙」(森田草平), 「キッチン」(吉本ばなな) など		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
近現代小説に表れている、日本人の恋愛観や友情観について、言語文化という点から理解を深めようとしている。	恋愛と友情の狭間という視点から、登場人物の心理を表現に即して的確に捉えている。	近現代小説に表れている、日本人の恋愛観や友情観について、言語文化という点から理解を深めている。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	<p>本単元では、日本人の恋愛観や友情観について、言語文化という点から探究するため、「友情と恋愛の狭間」をテーマに小説を読み比べ、このテーマについて批評文を制作する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小説を読み、テーマに関連した部分の描写や描かれ方の特徴をカードにまとめる。</li> <li>・ カードを基にして読んだ作品の特徴を比較し、友情と恋愛について、作品間の描かれ方の違いと共通点を取り出す。</li> <li>・ テーマについて考察の論点を決め、自分の解釈を書き出す。</li> <li>・ 批評文を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一人で複数の小説を読み比べる活動に抵抗のある教室では、グループを組んで一人一冊ずつ分担して読み、後で読んだ作品を紹介し合って比べさせる。</li> <li>・ 批評文をいきなり書かせるのではなく、批評のための材料となる情報の収集、分析、整理をしっかりとさせるとともに、各自の論点(論じる際のポイントとなる事柄)を明確化させる。</li> </ul>
第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 批評文を互いに読み合い、コメントカードに講評を書いて渡す。</li> <li>・ 全員の批評文を製本する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コメントカードの記入に当たっては、おざりなコメントにならぬよう、質問なども織り交ぜて具体的に書くようにさせる。</li> </ul>

## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである（目標では、2つの評価の観点に分割している）。

エ 近代以降の言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、言語文化について理解を深めること。  
「現代文A」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ウ 図書館を利用して同じ作者や同じテーマの文章を読み比べ、それについて話し合ったり批評したりすること。  
「現代文A」 内容の(2)

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 作品リストとテーマを提供する

本事例の言語活動を行うためには、教材としての小説のリストを教師が提供できることが前提となる。「友情と恋愛の狭間」というテーマは近現代の小説でしばしば取り上げられてきたものであり、我が国の言語文化を捉える上で、様々な論点を内包している。このようなテーマも初めは教師が準備しておきたい。活動の要領が分かり、この方法で小説を読み比べることの面白さが分かれば、生徒は自らの興味・関心でテーマを決めたいと思うようになる。

## ○ カードによる情報の収集と分析をさせる

小説を読んだら、カードを用いてテーマに関連する情報を取り出し、分析する活動を行う。カードは、右の②に記す事項一つごとに1枚を用いる。これがたくさんたまっていくと、それだけ読みが豊かになっていったことの実感につながる。

カードがたまったら、机をつなげるなどして広い平面空間を確保し、全てをそこに広げる。広げたカードを読み比べ、記された情報に何らかの共通点のあるカードをまとめ、共通する事項をメモ書きする。共通事項でカードをまとめていき、より大きな共通事項が見付かったら、それに属するカード群をまとめていく。この作業を繰り返しながら、どのようなことについて共通点と相違点が目立つかを考察する。これが論点になる。（例：恋愛と友情の一方が優先される時の条件は何か。恋愛と友情が共に成立する場合としない場合との分かれ目はどこにあるか。）

## 【カードに書き込む情報(例)】

- ① 読んだ作品についての基本情報  
(作者名・書名・発表年・出版社)
- ② テーマに関連する本文の設定や描写、構成に関する情報
- ③ 上の情報から解釈される当該作品の特徴

## ○ 批評文の構成を確認する

批評文は、次のような構成で書くことを確認する。

- ① 問題の所在：テーマについてどのような問題や関心をもったか、カードの分析で見えてきた論点を簡潔に書く。特に、自分の生活経験と関連付けるとよい。
- ② 読んだ作品の基本情報：読んだ作品の出典と概要を簡潔に書く。
- ③ 作品の比較考察：カードで分析した内容を基に、自分が立てた論点を考察する上で重要と思われる描写や構成を示し、作品ごとの特徴や作品間の共通点・相違点についてまとめる。ここでは小見出しを効果的に使わせる。
- ④ 結論：比較考察の結果として到達した論点に対する自分の見解をまとめる。

## 【批評文の構成(例)】

- ① 問題の所在
- ② 読んだ作品の基本情報
- ③ 作品の比較・考察
- ④ 結論

【学習活動の概要】

1 単元名 小説を読んで作者の表現意図を捉えよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章を読んで、書き手の意図を的確に捉えようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 文章を読んで、書き手の意図を的確に捉える。 (読む能力)</li> <li>・ 語句の意味、用法を的確に理解する。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 小説を読んで表現の仕方について話し合い、まとめたことを発表すること。		
(2) 教材 近現代の小説(例えば「復讐」(三島由紀夫))		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
小説を読んで、書き手が表現に込めている意図を根拠に基づいて考えようとしている。	小説を読んで、書き手が表現に込めている意図を根拠に基づいて考えている。	文脈に即して、語句の意味、用法を理解している。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	<p>本單元では、小説の書き手が、表現や用語に込めていることを、話し合いや発表を通して考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作品を読んで、内容を捉える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習の見通し、特に第2次における言語活動について知らせ、第1次で、課題をもって作品を読むことができるようにする。</li> <li>・ 生徒の実態に応じて、構成や展開、語句や語彙なども指導する。</li> <li>・ 考える時間を確保する。</li> <li>・ 文中の表現を根拠にするよう助言する。</li> <li>・ 説明の際に用いるホワイトボードに考えを記述させる。</li> <li>・ 質疑応答で考えを交流させる。</li> <li>・ 根拠に基づいた生徒それぞれの考えを大切に、教師の考えを正答のように示すことはしない。</li> </ul>
第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 書き手が工夫していると思う表現を抜き出し、そこに込められている意図を考え、説明する。(個人、ペア)</li> <li>・ グループで取り上げる表現を決めて考察し、考察した内容をまとめる。(グループ)</li> <li>・ 各グループがホワイトボードを示して説明する。(全体)</li> <li>・ 話し合いや説明を踏まえ、それぞれの表現、さらに当該作品は、どのような意図の下に書かれたものなのかをまとめる。(個人)</li> </ul>	

【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである（主に下線部）。

イ 文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうこと。  
「現代文B」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ア 文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。  
「現代文B」 内容の(2)

【言語活動の充実の工夫】

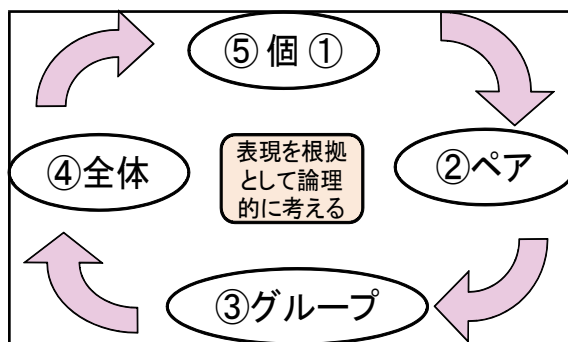
○ 目的や意図に応じた読みをさせる

本事例のような言語活動を行うためには、例えば第1次で教材を読む場合、第2次の言語活動について知らせ、学習の見通しをもたせることが大切である。それが、小学校・中学校を通して指導している、目的や意図に応じて読むことを生かすことになる。

○ 様々な単位での言語活動を設定する

本事例における言語活動では、

- ① 一人一人が文章を読み、課題について、自分の考えをもつ。
- ② 自分が考えたことを、ペアで説明し合う。
- ③ グループで話し合い、文章にまとめる。
- ④ グループごとに全体場で説明する。
- ⑤ 一人一人が考えをまとめる。



という過程をとっている。それは、次のようなことに配慮したためである。

- ①は、目に見える言語活動だけではなく、一人一人が深く考える時間を大切にするため。
- ②は、二人で考えを説明し合うことにより、自分の考えを明確化していくため。
- ③は、他の人の考えを知り、考えを深め、広げ、グループとしての読みを形成するため。
- ④は、読みや考えの交流、共有化を一層図るため。
- ⑤は、自己の読みや考えの一層の相対化を図るため。

なお、③の段階では、複数の考察の視点を示し、生徒が選んだ視点ごとに異質なグループを構成し、その後、グループを組み替えて、異なる考えを説明し合うことなどの工夫もしたい。

○ 読むことの指導においては、読むという言語活動だけでは不十分である

読むことの学習指導においては、本事例のように、話し合いや発表などという、考え、表現する言語活動を通すことが、読みを深めることに資する。

なお、読むことの指導における言語活動としての話し合いは、勝手気ままに自分の考えを述べ合う場でもなければ、合意を形成する場でもない。したがって、①から⑤のどの段階においても、文章中の表現を根拠とし、論理的に考えることを意識させる必要がある。

また、本事例のように、生徒が主体的に考える授業を展開したときには、授業の過程での指導を重視し、教師が最後に正答のように読みをまとめるという授業の型を破ることも求められる。

【学習活動の概要】

1 単元名 テレビドラマに関する、新聞のテレビ欄の記事を書こう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>文章を読んで、人物、情景、心情の描写などを的確に捉え、表現を味わおうとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>文章を読んで、人物、情景、心情の描写などを的確に捉え、表現を味わう。(読む能力)</li> <li>語句の意味、用法を的確に理解する。(知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 小説をテレビドラマにすると想定し、新聞のテレビ欄の記事を書くこと。		
(2) 教材 「山月記」(中島敦)		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
小説に描かれている人物、情景、心情を表現に即して読み深めようとしている。	小説に描かれている人物、情景、心情を表現に即して読み深めている。	語句の意味、用法を、文脈に即して理解している。
5 単元の指導計画		
	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	本単元では、テレビドラマにすると想定して小説を読み、配役を考え、新聞のテレビ欄の記事を書く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>小説を読む前に、学習の見通しをもたせる。その際、必要に応じて複数のテレビ欄の記事内容を分析し、その特徴を捉えさせる。</li> <li>新聞のテレビ欄にふさわしい表現方法を工夫させる。</li> <li>記事は必ず作品中の表現を根拠として書き、相互に検討する際も根拠を明確にするようにさせる。</li> <li>各グループの視点や切り込み方が多様になるように、グループ間で、随時、情報交換させるようにする。</li> </ul>
第2次	本文を読み、ストーリーの展開や内容、人物の特徴についてまとめる。(個人→グループ)	
第3次	第1次でまとめた人物像などに基づいて、テレビドラマにおける配役やストーリーの展開を考え、新聞のテレビ欄の記事を書く。(グループ)	
	書き上げた記事の相互評価を通して、小説に描かれた人物、情景、心情の描写について読み深める。(グループ→個人)	



【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである（主に下線部）。

イ 文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうこと。  
「現代文B」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ウ 伝えたい情報を表現するためのメディアとしての文字、音声、画像などの特色をとらえて、目的に応じた表現の仕方を考えたり創作的な活動を行ったりすること。  
「現代文B」 内容の(2)

【言語活動の充実の工夫】

○ 読みの質を高める

生徒が身近に感じる言語活動を取り上げ、かつ学習の見通しを明確にすることは、生徒の「読み」の意欲を高め、「読み」の質を高めることにつながる。また、読むことの言語活動における課題については、より深い「読み」が不可欠となるものを取り上げることが大切である。本事例では、適切な配役を決定するために、人物像のよりの確な把握が求められる。更に、効果的な見出しを付けたり記事を書いたりするために、文章の内容や展開のよりの確な把握が必要となる。

○ 目的に応じた表現を考える

本事例では、「山月記」をテレビドラマにすると想定し、新聞のテレビ欄の記事を作成する。実際のテレビ欄の記事は新聞によって異なり、一つの番組に対して数種類ある。それぞれ字数や様式、目的が異なるので、対象が同じであっても、視点や切り取り方が違っている。生徒の実態に応じて、このことを確認させた上で、教材として取り上げた小説を、複数の視点で検討したり、目的に応じた表現の仕方を考えたりすることで、生徒の「読み」は自ずと深まっていく。加えて、書き上げた記事を相互評価することで、生徒は自らの表現を客観的に見つめ直すことができ、それを通して自らの「読み」を省み、深めていくことができる。

「山月記」を〇〇〇〇の脚本でドラマ化  
新進脚本家〇〇〇〇、注目の第2作

エリート官僚を襲った悲劇!!  
腕がっ! 脚がっ! 顔がっ! ……  
何が彼を変えたのか?!  
それは臆病な自尊心なのか?  
それとも尊大な羞恥心なのか?

原作 中島敦 脚本 〇〇〇〇  
出演 ◇◇◇◇ △△△△ ほか



【生徒の作品例】

【学習活動の概要】

1 単元名 ICTを用いて発表資料を作ろう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現しようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現する。 (書く能力)</li> <li>・ 文体や修辞などの表現上の特色を理解している。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 ICTを用いて発表用資料を作成すること。		
(2) 教材 課題に応じた情報		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
課題にふさわしい情報を適切に選び、利用しやすく整理して、効果的に発表するために役立つ資料を作成しようとしている。	課題にふさわしい情報を適切に選び、利用しやすく整理して、効果的に発表するために役立つ資料を作成している。	発表資料にふさわしい文章の形態や文体、語句の使い方などについて理解している。
5 単元の指導計画		
	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
	本単元では、ICTを活用して、発表に用いる資料を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ICTを活用するに当たって、伝えたい情報を表現するためのメディアとしての文字、音声、画像などの表現の仕方について確認させる。</li> <li>・ ICTを用いるに当たっては、発表の目的や場を具体的に設定し、それにふさわしい表現形式(メディア)を選択させる。</li> <li>・ これまでの学習で身に付けた能力を総合的に活用させる。</li> </ul>
第1次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題に関する情報を収集する。</li> <li>・ 収集した情報を読み、その価値を判断し、必要なものを選択する。</li> </ul>	
第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 収集、分析、整理した情報を基に、課題についての自分の考えをまとめる。</li> </ul>	
第3次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ICTを用いて発表用資料を作成する。</li> <li>・ 効果的に表現できているか推敲する。</li> </ul>	
第4次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作成した資料を用いて発表する。</li> <li>・ 相互評価を基に資料を改善する。</li> </ul>	

## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである。

エ 目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。  
「現代文B」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ウ 伝えたい情報を表現するためのメディアとしての文字、音声、画像などの特色をとらえて、目的に応じた表現の仕方を考えたり創作的な活動を行ったりすること。  
「現代文B」 内容の(2)

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 伝えたい情報を表現するメディアを使いこなす

現代社会では伝えたい情報を表現するために様々なメディアが用いられている。そこで、その特色を捉え、使いこなすことが求められている。メディアについては、右のように3つに分ける捉え方がある。本事例では、②の「表現メディア」を具体的な対象としている。

- |  |
|--|
| ① 情報メディア：新聞、テレビ、電話、電子メール、ウェブページなど<br>のような情報を伝えるためのメディア       |
| ② 表現メディア：文字、文、文章、音声、画像、図表などのような伝えたい情報を表現するためのメディア            |
| ③ 通信メディア：電気信号を伝える電波や電線、音声を伝える空気など<br>のような表現されたものを伝送するためのメディア |

## ○ 生徒がICTを活用して表現する

授業でICTを活用するに当たっては、教師が教材などを提示する、生徒がデジタル教材を用いたり、インターネットで情報を収集したりするだけではなく、生徒が自らの考えを表現するときに日常的に用いるようにしていく必要がある。その際、電子会議システムなどを活用して交流することもできる。高等学校学習指導要領国語編では、「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」において「音声言語や画像による教材、コンピュータや情報通信ネットワークなども適切に活用し、学習の効果を高めるようにすること。」としている。具体的には、本事例で取り上げた言語活動例のほかに、「国語総合」の「C読むこと」では「文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。」を、「国語表現」では「話題や題材などについて調べてまとめたことや考えたことを伝えるための資料を、図表や画像なども用いて編集すること。」を示している。

## ○ 学習形態や表現形式を生徒に選ばせる

本事例では、学習形態や表現形式（メディア）を具体的に示すことをあえて行っていない。学習形態としては、資料の作成を全て個人で行うことも、ペアやグループで行うことも可能である。また、ICTを用いて作成する資料も、プレゼンテーションソフトを用いた、文字、音声、画像などを含む資料、ポスターセッション用の大きな資料、聞き手に配布するためのA4判の資料など多様にある。目的や場に応じて、それらを生徒に選択させることも大切な学習活動である。なお、本事例で取り上げた言語活動は、教材の文章の要約や、本の帯、広告カード（ポップ）の作成をICTを用いて行うなど、読むことの指導でも活用することができる。

【学習活動の概要】

1 単元名 季語でクイズ大会を開こう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しようとする。(関心・意欲・態度)</li> <li>・ 古典特有の表現を味わう。(読む能力)</li> <li>・ 古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解する。(知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 調べたことを、関心をもってもらえるよう工夫して報告すること。		
(2) 教材 『ことばの歳時記』(金田一春彦), 『俳句歳時記』(飯田蛇笏・山本健吉ほか), 『季語語源成り立ち辞典』(榎本好宏) など		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
季語の語源や成り立ち、昔と今の語の意味や用法の違いについて理解しようとしている。	俳句に表された季節感や情景を、情感豊かに読み味わっている。	季語の語源や成り立ち、昔と今の語の意味や用法の違いについて理解している。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	<p>本単元では、グループごとに季語を集めてクイズ問題を作成する。授業では、グループで司会を担当してクイズを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関心をもった季語を集め、カードに、その意味、語源や成り立ち、詠み込まれた俳句を記す。</li> <li>・ グループでカードを持ち寄り、季語の意味、語源や成り立ち、詠まれた俳句などについて選択肢形式の問題を作成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の実態に応じて、教師が季語クイズのモデルを示すなど、活動のゴール(学習の見通し)が分かるようにする。</li> <li>・ 目標となる語彙数を指定し、初めは、参考図書をそのまま写してもかまわないとする。</li> <li>・ 選択肢は4つ程度とし、正解と、説明するための解説とを用意させる。</li> </ul>
第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教室にクイズ大会用の会場を設け、グループごとに出題する。</li> <li>・ 興味をもった季語を選び、それを基に俳句を創作したり随筆を書いたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第2次のクイズ大会は、1回の授業で全員が行うほかに、帯単元として何回かの授業で冒頭の活動としてもよい。</li> </ul>

【解説】

【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである（目標では、2つの評価の観点に分割している）。

イ 古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりすること。 「古典A」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである。

イ 日常の言語生活の中から我が国の伝統と文化に関連する表現を集め、その意味や特色、由来などについて調べたことを報告すること。 「古典A」 内容の(2)

【言語活動の充実の工夫】

○ 学習活動のゴールを初めに示す

クイズ形式の活動は、生徒の興味・関心を喚起するのに適している。だが、季語のように、多くの生徒になじみのない語彙を使って問題を作成すると、抵抗感を訴える生徒もいる。そこで、本事例のような活動では、最終的にどのようなものが出来上がればよいのかが分かるように、そのモデルを初めに示しておくことが大切である。

○ 情報収集と問題作成の要領を示す

素材となる季語は『歳時記』などから集めることができる。本単元は、それをクイズ問題として加工する過程で、その意味や使い方、語源や成り立ちを理解するところにポイントがある。

**季語クイズ 第3問の正解と解説**

**問題 「小春日和」とは、何月ごろの季語？**

A 1月	B 3月
C 5月	D 11月

**解説:**「小春」とは、初冬の、穏やかで暖かい春に似た日和が続くころで、陰暦10月(新暦ではほぼ11月)の異称でもある。  
「小春日や石を噛み居る赤蜻蛉」(村上鬼城)

【作成問題例】

図の作成問題例に示しているように、問題は次の項目で構成する。

- ① 問題文：何を考えればよいのかが分かるように、簡潔に記す。
- ② 選択肢：必要に応じて、誤答となる選択肢はどうして誤答なのかが分かるようにしておく。
- ③ 解説：素材として扱った季語の意味、語源や成り立ち、作品例などを示し、どれが正解なのか簡潔に説明できるようにする（ゲームの最初は隠しておく）。

○ プレゼンテーションを工夫する

学習活動にゲーム的な要素が加わり、生徒が楽しみながら授業に参加することは、古典に対する関心を引き出すだけでなく、知識・理解を定着させる面でも効果的である。その際、問題を出題するグループにありがちなのが、進行役の生徒が、用意した原稿を聞こえないような細かい声で棒読みし、何の抑揚もなく作業的にゲームを進める姿である。それを克服するためには、日頃の人間関係づくりや言語環境の整備を学校全体で行うことはもちろんであるが、クイズ大会をパネルやプレゼンテーション・ソフトを活用してテレビ番組のように演出させたり、BGMや季語の指し示す対象が分かる映像などを準備したりして、多彩で面白い活動となるよう工夫したい。それらのアイデアをグループごとに競わせることも効果的である。

【学習活動の概要】

1 単元名 百人一首カルタを楽しもう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古典などを読んで、言語文化の特質について理解しようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 古典の和歌の調子を味わう。 (読む能力)</li> <li>・ 古典などを読んで、言語文化の特質について理解する。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 百人一首カルタ (百人一首クイズを含む) をすること。		
(2) 教材 百人一首		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
百人一首の独自の性格やその価値に気付こうとしている。	百人一首のそれぞれの歌のリズムを味わっている。	百人一首の独自の性格やその価値に気付いている。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	本単元では、百人一首カルタを行う。その際、グループ対抗で作者や歌に関するクイズも行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 百人一首を朗読，暗唱させる（長期休業中も含め，適切な期間をかけるようにする。）。</li> <li>・ 10首ずつ生徒に分担し，その歌については，暗唱することを必須とする。</li> <li>・ 分担に際しては，既習の内容に配慮し，作者や季節など調べる項目がなるべく公平になるようにする。</li> <li>・ 学校図書館と連携し，百人一首に関するコーナーを設ける。</li> <li>・ 百人一首カルタは，1単位時間で全員が行うほかに，生徒が継続的に伝統的な言語文化に親しめるよう，帯単元として授業の冒頭の活動に位置付けてもよい。</li> <li>・ 現代とのつながりという視点から百人一首の役割について考えさせるようにする。</li> </ul>
第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 同じ歌の分担となった生徒同士でグループをつくり，国語便覧や図書資料などを活用して，作者や歌の背景，特色などについて調べ，クイズを作成する。</li> <li>・ 百人一首カルタをする。</li> </ul>	
第3次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1回につき20枚程度の取り札とする。</li> <li>・ カルタ終了後，詠み上げた歌についてのクイズを出題する。</li> <li>・ 百人一首が我が国の言語文化に果たしてきた役割について考える。</li> </ul>	

## 【解説】

### 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである（主に下線部。目標では、2つの評価の観点に分割している）。

ウ 古典などを読んで、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。 「古典A」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

ア 古文や漢文の調子などを味わいながら音読、朗読、暗唱をすること。 「古典A」 内容の(2)

### 【言語活動の充実の工夫】

#### ○ 学習活動のゴールを初めに示す

百人一首カルタ（百人一首クイズを含む）を行うことを最初に示し、学習の見通しをもたせることで、生徒の古典に対する興味・関心を喚起することができる。

なお、百人一首カルタになじみのない生徒が多くいる場合などは、教師が実演したり、競技としての百人一首カルタの映像を見せたりするなどの配慮が必要である。

#### ○ 情報収集とクイズ作成の過程を大切にす

割り当てられた10首の歌については、国語便覧や、学校図書館の図書資料などを活用して、作者や歌の背景、修辞をはじめとする表現技巧などについて、様々な角度から調べることが、良質なクイズの作成に資する。

調べたことをクイズ問題として加工していく過程でも、百人一首のそれぞれの歌のリズムを味わったり、百人一首の独自の性格やその価値に気付いたりすることができる。選択肢問題を作る際には、それが一層深まっていく。

なお、問いの文は、何を答えればよいのか分かるよう簡潔にするとともに、選択肢問題の場合は、誤答となる選択肢はどうして誤答なのかが説明できるようにしておくことが、学習の深まりにつながる。

#### ○ 百人一首カルタで、朗読と暗唱を生かす

百人一首カルタでは、これまでの学習において朗読と暗唱に取り組んできたことを生かす活動であることを実感させたい。そのためにも、1回のイベントで終わるのではなく、帯单元のように継続して行うことが大切である。

また、右の写真では、学校図書館を利用して百人一首カルタを行っている。このような場面でも学校図書館を活用したい。

朗読、暗唱は、長い期間にわたる取組となる。一人一人の生徒では継続が困難な場合は、ペアやグループで取り組ませたり、百人一首カルタ（百人一首クイズを含む）をグループ対抗としたりすることで、生徒相互の学び合いや競い合いを効果的に活用していくのもよい方法である。



【グループでの調べ学習の様子】



【百人一首カルタの様子】



【学習活動の概要】

1 単元名 現代語訳を活用して源氏物語を読み味わおう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確に捉え、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしようとする。 (関心・意欲・態度)</li> <li>・ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確に捉え、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。 (読む能力)</li> <li>・ 古典に用いられている語句の意味、用法について理解する。 (知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 源氏物語の複数の現代語訳を読み比べ、それぞれの共通点や相違点、書き手の源氏物語の読み方の特徴についてまとめ、説明したり、話し合ったりすること。		
(2) 教材 源氏物語の本文(葵巻)及び当該巻の現代語訳作品7種(次ページ参照)		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
古典及びその現代語訳の比較を通して、それぞれの書き手の読みに触れ、ものの見方、感じ方、考え方を深めようとしている。	古典及びその現代語訳の比較を通して、それぞれの書き手の読みに触れ、ものの見方、感じ方、考え方を深めている。	古典の敬語が、現代語訳にどのように生かされているかを理解している。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	本単元では、源氏物語の本文(葵巻)及び当該巻の現代語訳作品7種を視点を決めて読み比べたことを、説明したり、話し合ったりする。 ・現代語訳を通読し、共通の視点に追加する、読み比べの視点を設定する。(個人)	・読み比べの共通の視点を指導者が示し、生徒には、それに追加する個々の視点を設定させる。 ・説明用資料は、文章だけではなく図表も用いるなど、表現の仕方を工夫させる。
第2次	・視点に基づいて読み比べ、説明用の資料を作成する。(個人)	・古典の原文や現代語訳の表現を根拠に、資料を作成させる。
第3次	・読み比べた結果を説明し合う。説明を聞きながら、現代語訳比較マトリックス(次ページ参照)を作成し、それを基に現代語訳のもつ魅力について話し合う。(グループ)	・現代語訳からも、古典の原文と同じように、登場人物の行動や心情が読み取れることを実感させる。



【解説】

【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の読むことの指導事項は、次のとおりである。

ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。 「古典B」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである（主に下線部）。

イ 同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。 「古典B」 内容の(2)

【言語活動の充実の工夫】

○ まとまった分量を読ませる

古典の指導、とりわけ、源氏物語などの長編作品については、教科書に掲載されている部分を読むだけに終わってしまうことが多い。今回の学習指導要領の改訂では、「古典A」において、まとまりのあるものを取り上げることが求めているが、「古典B」においても、教材の取り上げ方を工夫することで、ある程度まとまった分量を読ませることが可能である。その際、「国語総合」や「古典A」と同じく、古典に関連した近代以降の文章

- 【取り上げる現代語訳作品】
- ① 与謝野晶子『全訳 源氏物語 上巻』（角川文庫）
  - ② 谷崎潤一郎『新々訳 源氏物語 卷二』（中央公論社）
  - ③ 円地 文子『源氏物語 卷二』（新潮社）
  - ④ 橋本 治『窠変 源氏物語 3』（中央公論社）
  - ⑤ 瀬戸内寂聴『源氏物語』（講談社）
  - ⑥ 大塚ひかり『源氏物語 第一巻』（ちくま文庫）
  - ⑦ 林 望『謹訳 源氏物語 二』（祥伝社）

（本事例の場合では、現代語訳作品がそれに当たる。）を教材として取り上げることが効果的であり、それは、言語文化の変遷についての理解を深めるといふ、この科目のねらいにも資する。

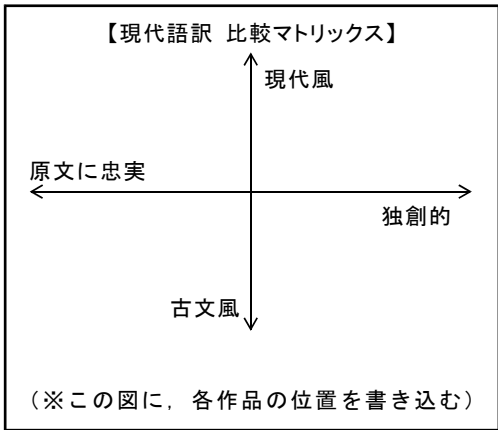
○ 一人一人の読み方を大切にす

読み比べの視点について、本事例では、下図の【現代語訳 比較マトリックス】に示している視点を全生徒共通としているが、それに追加する形で個々の生徒の視点も設定させ、一人一人の生徒の読み方を大切にしている。具体的には次のような視点が見られた。

- ・ 同じ場面を描いた部分を抜き出し、漢字と平仮名の使用を数値化し、それを基に文体を分析する。
- ・ 単語の訳し方に着目して分析する。例えば、「なまめく」は、多くの作品が「なまめかしい」としている中で、1作品だけが「可憐でみずみずしい」としていることに着目するなど。

○ 原文を大切にす

読み比べから分かったことを説明し、それを交流することでも読みは深まり、単元の目標を実現することになるが、その上に立って、古典の原文に立ち返り、現代という時点で、古典を読むとはどういうことなのかを生徒に感じ取らせることも大切である。



【学習活動の概要】

1 単元名 「色の名」について調べ、報告文にまとめよう		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古典に用いられている語句の意味、用法について理解しようとする。(関心・意欲・態度)</li> <li>・ 古典に用いられている語句の意味、用法について理解する。(知識・理解)</li> </ul>		
3 取り上げる言語活動と教材		
(1) 言語活動 古語辞典などの図書資料を用いて古典と現代の「色の名」を比較し、個々の言葉の由来や変遷、語彙としての特徴などについて報告する文章を書くこと。		
(2) 教材 古語辞典、図書資料など		
4 単元の具体的な評価規準		
	関心・意欲・態度	知識・理解
	古典に用いられている「色の名」の個々の語の由来や意味の変遷、語彙としての特徴について理解しようとしている。	古典に用いられている「色の名」の個々の語の由来や意味の変遷、語彙としての特徴について理解している。
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	<p>本単元は、古今の「色の名」について調べ、その結果を報告書にまとめる。</p> <p>＜日本語の「色の名」の由来を調べる＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 辞書などの図書資料を活用して、日本語の色の名の語彙体系の歴史の変遷などについて調べるとともに、個々の語の由来や意味の変化などを調べる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ あお、あか、しろ、くろなどの基本的な「色の名」に加えて、あい、あかね、あさぎなどの伝統色にも目を向けさせ、伝統的な言語文化への関心を高めさせる。</li> <li>・ グループごとに調べる色の名を分担するなど、作業の効率化を図る。</li> <li>・ 学校図書館と連携し、「色の名」に関するコーナーを設ける。</li> </ul>
第2次	<p>＜調べたことを報告文にまとめる＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 内容がよく分かるように構成を工夫して、論理的に表現する。</li> <li>・ 分かりやすい表現のために図表を利用したり、レイアウトを工夫したりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 報告文を発表し合う機会を設け、分かりやすい報告文のポイントを確認させる。</li> </ul>

## 【指導事例と学習指導要領の関連】

本事例の指導事項は、次のとおりである（主に下線部）。

ア 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。

「古典B」 内容の(1)

この指導事項を指導するのにふさわしいと考えた言語活動は次のとおりである。

ア 辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉とを比較し、その変遷などについて分かったことを報告すること。

「古典B」 内容の(2)

## 【言語活動の充実の工夫】

## ○ 日頃から日本語の語や語彙に関心をもたせる工夫をする

古語と現代語とでは使われる語も文法も大きく異なっていると感じる生徒は多いだろう。しかし、長い歳月の中で少しずつ姿を変えてはきたものの、それが同じ日本語であることに違いはない。日本語の語の中には、形や意味を保ちながら存在し続けているものもあれば、少しずつ変わりながら使われ続けているものもある。日常の言語生活においても日本語の語や語彙について関心をもたせ、個々の語の由来や歴史的な変遷に興味を向けるように配慮することが望まれる。

その際、特に、「語彙」という考え方を意識させることが大切である。例えば、親族を表す語彙として「ちち、はは、ぢぢ、ばば」を見れば、多くの生徒は、その「体系性」に気付くはずだ。鳥の名前の「カラス、カケス、ウグイス、ホトトギス」の共通点から、その命名の仕組みに気付く生徒もいるだろう。

現代日本語の「色の名前」も「語彙」として捉えれば、「そら、みず……」、「もも、ちゃ……」、「とび、うぐいす……」と命名の仕組みが見えてくる。「あい、あかね……」など伝統色の名前の由来の共通点もすぐに見いだせよう。「あお、あか、しろ、くろ……」の「色の名」の由来については、平易に書かれた解説資料も多く見付かるだろう（右図参照）。

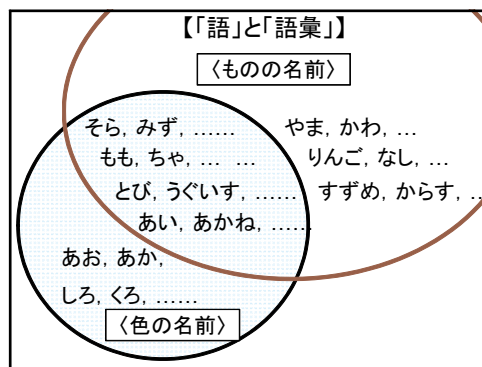
「色の名前」を発端として、さらに他の語彙、例え

ば擬声語、寒暖を表す語彙、味覚を表す語彙などへと関心を広げていくこともできる。

## ○ 報告文を書くための留意点を意識させる

まず、誰に読ませる報告文なのか、具体的に読者を意識させることが大切である。次に、報告文の構成については既に学習していることであり、「よい報告文の条件」を教師が説明するよりも、他の生徒が読んで納得できるようにするためにはどうしたらよいかを生徒自身に考えさせたい。その際、語や語句の選択、文の構造や文章全体の構成や展開などという視点だけではなく、図表の利用や紙面のレイアウトなども併せて考えさせるとよい。

読者意識を徹底させるためにも、報告文を発表し合う機会を設け、相互批評を基に推敲するという過程をたどるようにすることが望まれる。自分の報告文を読んだ他の生徒の反応が、文章を推敲することへの非常に強い動機となることを利用して、表現の改善に役立てるようにしたい。



※ 表の見方

分類・・・言語の役割を踏まえ言語活動を分類したもの（詳細は第2章7～9ページ参照）

(1) 知的活動（論理や思考）に関すること

ア 事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること

(i) 事実を正確に理解すること

(ii) 他者に的確に分かりやすく伝えること

イ 事実等を解釈し説明するとともに、自分の考えをもつこと、さらに互いの考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること

(i) 事実等を解釈し、説明することにより自分の考えを深めること

(ii) 考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること

(2) コミュニケーションや感性・情緒に関すること

ア 互いの存在についての理解を深め、尊重すること

イ 感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を互いに伝え合ったりすること

活動・・・思考力・判断力・表現力等を育むための学習活動（詳細は第1章5～6ページ参照）

① 体験から感じ取ったことを表現する

② 事実を正確に理解し伝達する

③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする

④ 情報を分析・評価し、論述する

⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる